慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	偉大なる恩師、利光三津夫先生を偲ぶ
Sub Title	
Author	笠原, 英彦(Kasahara, Hidehiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.4 (2010. 4) ,p.175- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	利光三津夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100428-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

教授たちが血の出るような努力をして築き上げてきた誇るべき学風を私たちはいかにして守り、発展させていくべきなのか。利光先生は私たちに、とてつもなく重い仕事を与えて、旅立たれたような気がする。

名誉教授
武蔵野大学長　寺崎　修

偉大なる恩師、利光三津夫先生を偲ぶ

昨年九月、わが恩師、利光三津夫先生が急逝された。巨星墜つの感しきりである。

訃報に接して一瞬、まるで全身を激痛が走ったように感じられた。しばし茫然自失。気を取り直して、あわただしく各方面に連絡を回した。そして、私は早朝の研究室で一人号泣した。

私事ながら、私はいまジストニアという神経難病と日々闘っている。発病、はや四年である。見た目にはわからないが、本人は両足が固縮して歩くに難渋し、脂汗が滲む。

しかし、恩師、利光先生はもっと重い生死にかかわる大病をされ、若くして片足を失い、義足の人生を過された。不肖の弟子とはいえ、私が弱音を吐くわけにはゆかない。つらいと、先生のご苦労に思いをいたし、自らを奮い立たせてきた。

亡くなる前の週、新宿のホテルでひさしぶりに利光先

生を弟子一同で囲み、歓談した。会がひけ廊下にでると、後ろから利光先生が私の肩に手を回してこられた。そして耳もとで「足はどうだね」とやさしく声をかけてくださったのである。私は「はい、なんとか……」と座の余韻を壊さないよう静かにお答えした。

覚えていてくださったのだ。私のような者のことを。うれしかった。思わず、涙が頬をつたった。帰途、先生のおやさしさが身にしみ、不覚にも涙が止まらなかった。行きかう人々の視線など、もはやどうでもよかった。

ご葬儀の間、先生と過させていただいた日々が走馬灯のように浮かんでは消えていった。私はあらためて利光先生を師と仰ぐことができた喜びを嚙み締めた。先生は学者としてはもちろんのこと、わが人生の師でもあった。多くの優秀な先輩方が偉大な先生のご業績にふれられるであろうから、凡人の私はあえて利光先生のご性格を彷彿とさせる普段着の先生の逸話をご紹介したい。

先生が慶應義塾にご在職中、よく先生の研究室にお呼びくださった。先生はお部屋に到着されると、いつもすぐ私の部屋に内線電話をくださる。

茶目っ気のある先生は、「笠原君。すぐに部屋に遊びに来てちょうだい」とおっしゃる。来て、インスタント・コーヒーをいれるようにという意味である。「君の入れるコーヒーは実においしい」と喜んでくださる。

たまに同席される利光門下の先輩、長谷山彰現常任理事も、「笠原君のいれるコーヒーは実にうまい」とおっしゃっていたから、あるいはそうなのかもしれない。あまり褒められたことでもないが、人間なんかしら取り柄があるものだ。

コツは実に簡単。コーヒーとクリープの粉を幾分多めに入れるだけである。利光研究室の訓である「節約」には反するが。この訓は候文で書かれ、部屋に貼られていた。

あるとき、商法の米津昭子教授が利光先生の部屋にみえ、その貼紙をご覧になるなり「くだらない」とおっしゃった。利光先生は「とほほほほ……」とうっぷして笑っておられた。利光先生は「先生（米津先生）のところじゃ、どうせボーナスが出たってベンツが飲んじゃうんだよな」と笑っておっしゃった。先生の研究室はいつも明るく、楽しい。

もちろん、ためになることも教えてくださる。「笠原君。宗教と学問の違いは何だ」と突然質問が飛んでくる。私がもっともらしいお答えをすると、「宗教は信じるこ

とから始まるが、学問は疑うことからはじまるのよ」と明快に言い切られた。

皇位継承問題を扱うようになって、なぜ意見は男系と女系に分かれるのか考えていたが、この利光先生の言葉が疑問を見事に氷解させた。

そうか、男系墨守を唱える神社本庁や神道政治連盟は伝統を重視し、神を信じてひたすら祈っているのだ。われわれ研究者や官僚は皇統の存続のため、有効性、合理性の観点から「皇位継承資格の女性・女系への拡大」を提唱しているのである。

信仰、信念、情念の人に理屈は通用しない。合理主義がいつも正しいなんて、そもそも傲慢なのである。利光先生のおかげで、考察はどんどん深まる。伝統のもつ非合理性をわれわれも敬意をもって考え直す必要がある。

利光先生は学問一途であられた。深夜、根を詰められると、笛の音が聞え、女性が姿を現すそうである。もちろん医者は幻聴、幻覚でかたづけるだろうが、なんとも凄まじい学者魂である。利光先生に心より感謝申し上げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げる。

法学部教授　笠　原　英　彦

利光先生を偲ぶ

申し訳のないことではあるが、私が利光先生のお教えを受ける契機となったのは、自らの意志によったものではなかった。当時、師事していた東京国立博物館のI先生のもとへ、慶應の大学院へ進むとの報告をしに行ったところ、I先生は、私の専攻を聞くより先に、「慶應ならばまず利光先生に法制史を学ばなければいけない」と仰り、その場で利光先生に電話を入れて、私の入門を依頼して下さった。利光先生のお名前は、こうした異分野の世界にも鳴り響いていたのである。

さて私が弟子入りを許されて先生のお宅に参上すると、書斎の机の上に一尺四方ほどの桐箱が置かれていた。命ぜられるままに真田紐をほどいて蓋をとれば、銀色に輝く一枚の鏡が納められていた。「どう見るか」とのお声に、返答に窮しながらも「鏡面を拝見してよろしいでしょうか」とお尋ねし、お許しを得てから、指紋がつかぬよう留意しつつ徐に縁に指をかけて裏返そうとした瞬間、